

学生相談室における「グループ活動」検証の試み

甲南大学学生相談室 友久茂子・渡里千賀・松本知子

I. はじめに

大学生活は自己探求の時である。この貴重な時にこそ、大学生は多様な経験を通して対人関係のあり方を学び、自己を相対化して新たな自分に出会い、社会に飛び立つ準備を進めていくことが求められる。しかし、現実には、近年の学生が大学入学までに過ごした人生は、希望の大学に合格することが目的となり、大学生活で何をして、どのように過ごしたいかについては、ほとんど思い描くことができずに大学生活をスタートさせる場合が多い。さらに、入学後は、大学のカリキュラムとして与えられた授業の単位を取得することに熱心に取り組みはするが、その後にある社会人としての可能性を見出すための課外活動への参加など、主体的に自らの興味や関心に従って体験を深める学生は極端に減少しているように思われる。

また、一般学生の傾向と連続線上の問題として、発達障害、あるいはその傾向が認められる学生も、ここ数年増加している。2013年度の独立行政法人日本学生支援機構の調査(2014)によれば、全国の国公立大学780校(2,562,258人)の中で発達障害(LD、ADHD、高機能自閉症など)と重複障害の診断を受けている学生は2,042人で、診断は受けていないが何らかの支援を受けている学生数は4,225人となっている。2009年度の調査(2010年)では、診断を受けた学生が458人で、2013年度は2010年度の約4.5倍に、支援学生全体としては10倍近くに増えた計算になる。ただし、4年前には診断を受けていても申告しないケースもあったのではないかと考えられる。しかし、筆者の現場感覚的には納得できる数字である。

『精神療法』Vol.37No.2(2011)では「自閉症

スペクトラム障害の学生相談」という特集を組み、全国の10大学における発達障害の学生相談について、現状や課題を報告している。その中で、藤井(2011)は、「発達障害のある学生の支援に関する全国調査」や「大学・短期大学及び高等専門学校における障害の学生の支援に関する実態調査」から、発達障害のある学生への支援が充実するために、次のような提案をしている。一つは支援体制として、「窓口となる各部局と他の部局や教員との連携をとること」と、教職員間の「理解促進の方法を明らかにして支援の取り組みを充実させること」である。また、学生相談室の今後の課題として、「本人や保護者の障害理解とその障害の受け入れに関する研究の推進が求められる」と述べている。

このような現実に対応するために、全国の大学における学生相談室では、個別のカウンセリング以外に様々な取り組みが行われている。その一つとしては、学生相談室カウンセラーが担当する授業として実施されるものである。たとえば、入学時点での、大学への「適応支援」と「心理的発達支援」を目的とした講義、あるいは、心理的サポートや心理的問題の予防を目的とした「心の健康」についての講義、そして、少人数によるグループワークを中心とした体験重視の授業があげられる。授業以外にも、多くの学生相談室でグループを対象にした取り組みを行っている。早坂(2010)によると、学生相談機関で実施されているグループ対象の取り組みは、①エンカウンター・グループ ②心理教育プログラム ③体験・教室 ④談話室の運営に分けることができるとしており、主たるねらいとしては、グループ体

験・交流、自己理解・気づき、スキル学習、居場所づくりなどがあげられている。

本学においては、入学時の適応を目的とした授業は、いまだ実施されていないが、心の健康に関する講義では広域副専攻科目の「心の健康科学」「癒しの諸相」およびマネジメント創造学部の「心理学と現代社会」と、学生相談室カウンセラーが3科目を担当しており、履修した一定数の学生には、青年期の心の問題について考える機会が与えられている。体験を重視したグループワーク中心の授業としては「自己の探求」①②③④と広域副専攻科目の4クラスが設けられている。①～③はそれぞれ、「茶の湯」、「グループ体験」、「陶芸」に分かれ、各クラス定員15名で募集し、④は定員を設けず、体験を含めた講義が実施され、毎年40～100人程度の学生が受講している。これらの試みを検証した先行研究はまだ少ないものの、初期適応のための予防的支援としての授業については布柴・吉武（2011）の報告があり、本学の体験型授業の成果については、青柳（2010）、青柳・大谷（2013）が報告している。

学生相談室が実施しているグループ活動を、早坂の上記のような分類のどこか1つに当てはめることは難しいが、本学では2000年度から体験を通じた心理教育として、毎週金曜4限に、「Reアワー」（2009年度までは「ウィークリーグループ」）と名付けて、さまざまなプログラムを準備し、年間22回～30回開催している。また、年に2回は外部講師を招いて（2010年からは2回の予算が認められず1回は学生相談室スタッフがファシリテーターを担当している）、普段は実施しにくいプログラムを準備し毎年開催している。さらに、3年前から始めたランチアワーは、授業と試験期間に、週2回（2011年度は週1回）開催している。本学におけるこれらのグループ活動のねらいは、何らかのスキルを学ぶことではなく、主に、近年忘れられがちな五感を通じた体験の提供であり、体験を通じた人との交流から自己理解を深めると

いったことである。このようなグループ活動は、目的や方法に多少の違いはあるものの、全国の多くの大学で実施され、各大学が発行する紀要や年報に「報告」として掲載されている。そして、実際グループ活動を実施しているカウンセラーは、そこに参加する多くの学生にとって、何らかの意味があり成長の助けになっていることを実感している。しかし、大学の学生相談として、どれほどの成果を上げているか、根拠を示せと言われると、はなはだ心許ない。確かに、個人面接とグループを併用することで、成長が促進されたことは事例研究として幾つかの報告がある（友久，2009；的場，2011；高橋・石本・新野，2012；片山，2013など）。また、菊池（2013）は、グループワークの実施形態を「単発型」「継続型」「合宿型」と分け、実施形態が異なることによる参加者及び実施者への影響について丁寧に考察している。しかし、いずれの論考も、「グループ活動」そのものにどのような意味があったか、根拠をあげて成果を示すのに十分とは言えない。そうすると、学生相談室が実施しているグループ活動は、その意義についてほとんど実証されないまま、全国の多くの大学で実施されていることになる。

もともと、筆者らカウンセラーは、自分たちのカウンセラーとしての業務について、ひとまとまりの「仕事の成果」として示そうとする意識が高いとは言えない傾向がある。つまり、カウンセラーは、向き合った個々のクライアントの心の成長について語ることはできても、カウンセラーの懸けたエネルギーに対して、自分が担当するクライアントの成長を、対価として評価する発想を持ちにくいということであろう。本来心のエネルギーは数字として評価しにくいいため、近年教育に対しても使用されるようになった「費用対効果」といった物差しを持つことはさらに難しい。しかし、少子化による大学冬の時代は長引き、厳しい寒さの中で、学生への温かなサービスを仕事とする学生相談も、ある程度自らの活動を評価し、そ

の存在意義を訴えていかなければ、十分に機能しつつ今後も長く存続することが困難になっているのではないだろうか。特にグループ活動の実施は、ファシリテーターとしての高度な専門性を求められるにもかかわらず、外からは「誰にでもできる簡単な仕事」ととられがちで、カウンセラーとしての専門性を揺さぶられることにもなる。そんな意味からも、学生相談室で行うグループ活動については、自分たち自身で適切な評価をし、今後の課題を見出すという視点を見失ってはならない。

学生相談の評価については、池田（2012）がアカウンタビリティという会計上の用語を応用して、次のように述べている。「大学教育の質の維持、向上に対して学生相談システムが重要な役割を担っていることは否定しないものの、学内の限られた資源を配分するに値する貢献を果たしているかは経営上の重要問題であり、学生相談活動の維持と拡充のためには成果についての説明責任（アカウンタビリティ）を果たす必要があるだろう。」

池田の言う「成果」と言えるかどうかは疑問だが、ここでは本学学生相談室におけるグループ活動について振り返り、そこにどのような意味があったか、あったとすれば、どのような意味があったかについてできるだけ根拠を示して説明し、今後どのような活動を、どのように展開することが求められているかを考察したい。

II. 方法

本学学生相談室では、1989年の開室当初から、施設の制約学内の他の場所を借りてではあったが、年に2回のグループ活動を実施していた。本格的にグループ活動を実施し始めたのは、2000年に、本校舎から道路を隔てたところに位置する18号館の中に現在の学生相談室が完成し、サロン室やグループワーク室が確保できてからのことである。

そこで、2000年度以降に実施してきた週に1回（原則金曜日）のグループ活動（以下「継続型」と記述）と、年に2回外部講師を招いたグループ活動（以下「単発型」と記述）の内容と参加人数をそれぞれ示し、本学学生相談室におけるグループ活動がどのような経過をたどったかを記述する。次に2011年度から始めたランチアワーについても参加人数の推移を示し、内容について記述する。そして、それらの資料を相互に比較することを通して、グループ活動の意義や問題点について検討したい。

III. 本学学生相談室における各グループ活動の概要

以下に各グループ活動の形式や内容、その経緯について説明する。

(1) 継続型グループ活動

継続型グループ活動は、授業実施期間に限って毎週金曜日の4限に実施してきた。プログラムの内容は、言語コミュニケーション力を磨くことや、特定のスキルを磨くことを直接的に目的とするのではなく、近年の若者に圧倒的に不足している「体験そのもの」に重点を置いて組んでいる。具体的には五感を磨く体験である、陶芸、園芸、料理、茶の湯、書道に加え、身体感覚を磨くリラククス体操などと、アイデンティティの形成や自己理解に役立つ心理テストの実施、その他、年度によっては季節を感じる学外への小遠足なども行ってきた。名称は最初「ウィークリーグループ」であったが、2009年度に参加者が急に減少したため、そのことを受け、親しみやすさを高める工夫のひとつとして、2010年度からは「Reアワー」と改名した。「Re」はメールの返信に用いられることで学生には馴染みやすく、スタッフとしては Re-lax、Re-fresh、Re-cover といった言葉から浮かぶイメージの効果を意識している。当初は希望者が来たい時に気軽に参加できる形式を

とっていたが、2012年度からはプログラムの内容によって数回分の統一したテーマを決め、一まとまりのセミナー形式で、原則予約制とした。プログラムは多岐にわたって、実施にはそれなりの費用が必要であるが、学生相談室主催のグループ活動は常に学生には無料で提供してきた。また、場所は学生相談室内のサロン室や畳敷きのグループワーク室であった。

(2) 単発型グループ活動

単発型グループ活動は、2000年度から2009年度までの10年間、年に2回外部講師を招いて行った。2回のうち主に春は「茶の湯」を、秋の催しは多岐にわたって実施した。茶の湯を継続した理由は二つあり、一つは震災後に復興された建物の中に学生相談室が設置されるに当たって、日本の文化を重要視したいというスタッフの思いがあり、グループワーク室を畳と障子の部屋とし、ある程度の茶の湯道具を準備することができたため、それを生かす必要があったことである。二つ目は、たまたま、その時来校していただいた茶の湯の講師が本学の卒業生で、茶席の準備などに協力的であったことで、10年間継続することができた。しかし、6年目あたりから、徐々に参加者が減少し、その理由として本校舎と離れた学生相談室での開催という場所の要因があるのではないかと考えられたため、2010年度には「茶の湯」は実施せず、2回とも本校舎構内の小体育館を利用し、「カプラ」と「ユニカール」を実施した。その後、2011年度には講師謝礼の予算が年1回分に縮小されたため、他の1回はスタッフが自分たちでできる企画として、大学祭期間中に「カード遊びでコミュニケーション力をつける」や「たこ焼きパーティー」をすることになった。

(3) ランチアワー

もともと、学生相談室のサロン室は学内に適当な場所を見出せない学生の居場所として、休憩

や、昼食をとる場にはなっていたが、2011年度から週に一度（原則授業実施期間と試験期間）カウンセラーを囲んで一緒にご飯を食べる企画「ランチアワー」を始めた。ランチアワーは、Reアワーの参加者が減少傾向にある理由の検討から発案されたプログラムである。Reアワーへの参加者が減少した理由の一つは、Reアワーが授業時間帯に実施されることがあると考えられた。つまり、かつては自分が履修している授業があっても、興味のある催しが開かれていれば、1回だけなら授業を休んででも、興味のある方に参加する学生が相当数存在していたが、近年のほとんどの学生にとっては授業への出席が絶対的義務と感じられており、自分の興味を優先することを是としない傾向があるのではないかということである。二つ目の理由としてはプログラムの内容が濃厚と感ずるのではないかと、つまり、幼少期から携帯電話やPC・ゲーム機器に囲まれて育った若者にとって、90分から2時間、少人数で生の感覚体験を共有するプログラムは、参加が躊躇される可能性があると考えられた。そこで、授業がなく、時間も短く、参加に負担感がないのはランチタイムであろうと考え、さらに、「便所飯」という言葉に代表されるように、昼食の場に困っている学生もいるのではないかと思われたため、実施し始めたものである。これは2012年度後期からは週1日から2日に拡大され、現在に至っている。

次に、2000年度以降のグループ活動それぞれについて、内容や参加人数の推移を図表に示し、その時の様子や、学生の反応について簡略に記述していく。

IV. グループ活動の経過

(1) 継続型グループ活動「金曜 Re アワー」

まず、「金曜 Re アワー」の2000年度から2013年度まで14年間の経緯を順に振り返る。学生の年間のべ参加人数と実施回数、1回あたりの平均参加人数を表1に、推移を図1に示す。またプログ

ラムの内容と、各回の参加人数を表2から表15にまとめている。

まず、参加人数の推移について見ると、開始当初の2000年度では、年間のべ参加人数が63人、1回の平均参加人数が2.7人と、参加人数は少ないが、その後徐々に増加し、2003年には年間参加人数が108人、平均参加人数が3.7人となっている。年間の実施回数も、2000年度は23回、2001年度は22回であるが、その後は26回～30回と増加してい

表1 継続型グループ活動の年間のべ参加人数と1回あたりの平均参加人数

年度	実施回数	年間のべ参加人数	平均参加人数
2000年	23	63	2.7
2001年	22	84	3.8
2002年	27	100	3.7
2003年	29	108	3.7
2004年	28	95	3.4
2005年	26	56	2.2
2006年	26	92	3.5
2007年	26	128	4.9
2008年	26	81	3.1
2009年	28	192	6.9
2010年	30	151	5.0
2011年	28	71	2.5
2012年	27	111	4.1
2013年	27	98	3.6

る。参加人数が0人という回が、2000年度には7回、2001年度・2002年度には5回ずつある（表2～4）。当時はまだこの活動が学生に周知されておらず、開催する側もどのような形で運営していくのか手探りの状態であったことがうかがえる。2005年度にはのべ年間参加人数が激減し、14年間で最も低い値となっており、後期の12月16日から最終日1月13日の3回は参加者がいずれも0人であった（表7）。これは、当時は金曜日勤務のカウンセラーが通常業務のかたわらグループの企画・準備を行っていたため、十分なことができない状況であり、さらにこの年、学内外で学生的事件・事故が続き、カウンセラーが危機対応に追われて、グループ活動の準備に時間をさけなかったことが関係していると考えられた。そういった事情に鑑み、2007年度にグループを専門に担当するカウンセラーを1名導入したことで、のべ参加人数は128人と大幅に増加した。担当者導入後の2007年度から2010年度までの間、参加人数が0人という回はなくなっている。しかし、2008年度にはまた参加人数が減少している。そこで、せっかくの企画に何とか参加してほしいという思いから、授業を担当するカウンセラーが一案を講じ

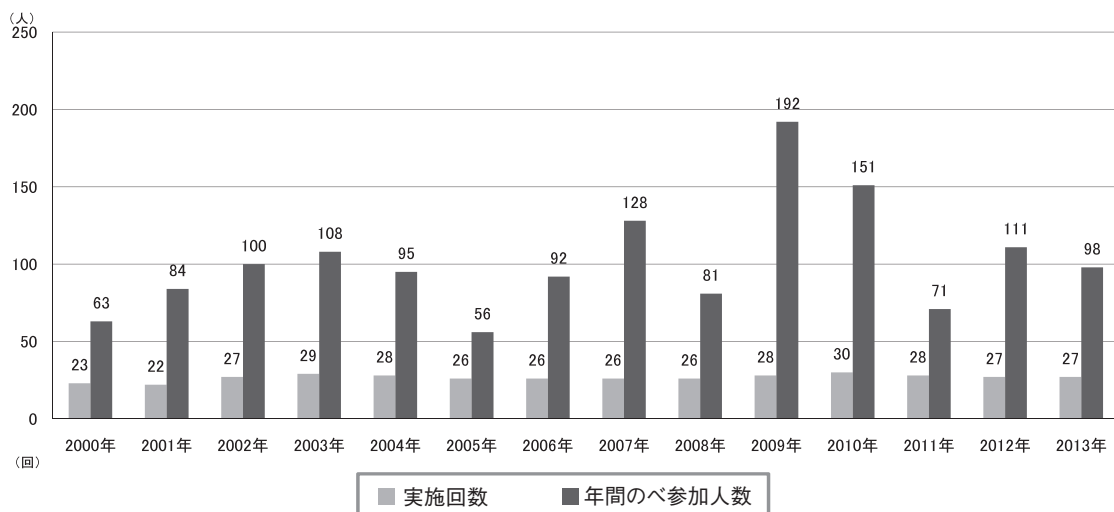


図1 継続型グループ活動の年間のべ参加人数推移

表2 2000年度 各回のプログラムと参加人数

回数	実施日	プログラム	参加人数
1	4月28日	ティーアワー	7
2	5月12日	心理テストで自己分析してみよう	4
3	5月19日	新緑にふれてみよう	2
4	5月26日	カルトってなに？	0
5	6月2日	ティーアワー	1
6	6月9日	やきものを創ろう①	10
7	6月16日	ビデオ鑑賞	2
8	6月23日	やきものを創ろう②	10
9	6月30日	やきものを創ろう③	9
10	7月7日	ティーアワー	0
11	7月14日	睡眠について	4
12	9月29日	ティーアワー	0
13	10月6日	癒しの音楽を聴こう	0
14	10月13日	コラージュを作ろう	0
15	10月27日	ビデオ鑑賞	0
16	11月10日	遠足に行こう!!	3
17	11月17日	薬との上手なつき合い方	1
18	11月25日	ランチパーティ (学祭期間中)	2
19	12月1日	七輪でやきものを創ろう①	1
20	12月8日	ティーアワー	0
21	12月15日	七輪でやきものを創ろう②	2
22	12月22日	七輪でやきものを創ろう③	3
23	1月12日	新年おもちパーティ	2
		合 計	63

表3 2000年度 各回のプログラムと参加人数

回数	実施日	プログラム	参加人数
1	4月20日	ティーアワー	6
2	4月27日	春の草花にふれてみよう	0
3	5月11日	やきものを創ろう①	13
4	5月18日	ビデオ鑑賞	4
5	5月25日	やきものを創ろう②	12
6	6月1日	やきものを創ろう③	7
7	6月15日	お菓子をつくろう	2
8	6月22日	癒しの音楽を聴こう	0
9	6月29日	精神科医の時間	3
10	7月6日	ティーアワー	0
11	9月28日	ティーアワー	0
12	10月5日	秋の草花にふれてみよう	2
13	10月12日	心理テストで自己分析してみよう	3
14	10月19日	七輪でやきものを創ろう①	8
15	10月26日	ティーアワー	0
16	11月2日	七輪でやきものを創ろう②	8
17	11月9日	七輪でやきものを創ろう③	6
18	11月16日	薬との上手なつき合い方	2
19	11月30日	「遠足」に行こう!!	0
20	12月07日	抹茶アワー	2
21	12月14日	ビデオ鑑賞	0
22	12月21日	年末おもちパーティ	6
		合 計	84

表4 2002年度 各回のプログラムと参加人数

回数	実施日	プログラム	参加人数
1	4月12日	ティーアワー	6
2	4月19日	春の草花にふれてみよう	0
3	4月26日	心理テストで自己分析してみよう!	0
4	5月10日	ティーアワー with 中国茶	1
5	5月17日	七輪でやきものを焼こう①	3
6	5月24日	クロワッサン作り	9
7	5月31日	七輪でやきものを焼こう②	4
8	6月7日	七輪でやきものを焼こう③	4
9	6月14日	ティーアワー with サッカー観戦	32
10	6月21日	コラージュをつくろう	1
11	6月28日	ビデオ鑑賞	6
12	7月5日	そばうちをしよう	4
13	7月12日	ティーアワー	2
14	9月27日	ティーアワー	1
15	10月4日	心理テストで自己分析しよう	3
16	10月11日	ビデオ鑑賞	1
17	10月18日	秋の草花にふれてみよう	0
18	10月25日	お菓子をつくろう	3
19	11月1日	抹茶アワー	3
20	11月8日	オーナメント作り	7
21	11月15日	七輪でやきものを作ろう①	3
22	11月22日	お好み焼きパーティ	0
23	11月29日	七輪でやきものを作ろう②	3
24	12月6日	ビデオ鑑賞	0
25	12月13日	七輪でやきものを作ろう③	3
26	12月20日	ティーアワー	1
27	1月10日	新年おもちパーティ	2
		合 計	102

表5 2003年度 各回のプログラムと参加人数

回数	実施日	プログラム	参加人数
1	4月4日	ティーアワー	6
2	4月11日	春のガーデニング体験	3
3	4月18日	心理テストで自己分析/続 春のガーデニング体験	7
4	4月25日	お菓子をつくろう	4
5	5月2日	初夏のガーデニング体験	2
6	5月9日	七輪でやきものをつくろう①	7
7	5月23日	七輪でやきものをつくろう②	6
8	5月30日	七輪でやきものをつくろう③	5
9	6月6日	ティーアワー/七輪でやきものをつくろう③	4
10	6月13日	初夏のガーデニング体験②	3
11	6月20日	ビデオ鑑賞	3
12	6月27日	コラージュをつくろう	0
13	7月4日	夏のガーデニング体験&収穫祭	2
14	7月11日	抹茶アワー	11
15	9月19日	ティーアワー	0
16	9月26日	コラージュをつくろう	2
17	10月3日	心理テストで自己分析しよう	3
18	10月10日	秋の草花を植えてみよう	0
19	10月17日	ティーアワー	2
20	10月24日	七輪でやきものをつくろう①	3
21	10月31日	秋のガーデニング体験&収穫祭	5
22	11月7日	七輪でやきものをつくろう②	3
23	11月14日	七輪でやきものをつくろう③	3
24	11月28日	抹茶アワー	3
25	12月5日	ビデオ鑑賞	1
26	12月12日	お菓子をつくろう	5
27	12月19日	ティーアワー	9
28	1月9日	新年おもちパーティ	3
29	1月16日	ティーアワー	3
		合 計	108

表6 2004年度 各回のプログラムと参加人数

回数	実施日	プログラム	参加人数
1	4月9日	ティーアワー	6
2	4月16日	春のガーデニング体験	2
3	4月23日	心理テストで自己分析	11
4	4月30日	お菓子をつくろう	10
5	5月7日	やきものをつくろう	3
6	5月14日	ペーパークラフト	0
7	5月21日	やきものをつくろう	2
8	5月28日	やきものをつくろう	2
9	6月4日	ビデオ鑑賞	2
10	6月11日	コラージュをつくろう	0
11	6月18日	初夏のガーデニング体験	0
12	6月25日	抹茶アワー	8
13	7月2日	夏のガーデニング体験&収穫祭	3
14	7月9日	ティーアワー	3
15	9月17日	ティーアワー	1
16	9月24日	心理テストで自己分析	2
17	10月1日	秋の草花にふれてみよう	2
18	10月8日	ペーパークラフト	2
19	10月15日	パンを焼こう!	11
20	10月22日	抹茶アワー	8
21	10月29日	コラージュをつくろう	2
22	11月12日	七輪で焼き物を焼こう①	5
23	11月26日	七輪で焼き物を焼こう②	2
24	12月3日	七輪で焼き物を焼こう③	2
25	12月10日	ビデオ鑑賞	1
26	12月17日	クリスマスフラワーアレンジメント	2
27	1月7日	新年おもちパーティ	1
28	1月14日	ティーアワー	2
		合 計	95

表7 2005年度 各回のプログラムと参加人数

回数	実施日	プログラム	参加人数
1	4月8日	ティーアワー	7
2	4月15日	春のガーデニング体験	1
3	4月22日	心理テストで自己分析してみよう	3
4	5月6日	初夏のガーデニング体験	1
5	5月13日	七輪でやきものを作ろう①	3
6	5月20日	コラージュをつくろう	2
7	5月27日	七輪でやきものを作ろう②	3
8	6月3日	七輪でやきものを作ろう③	2
9	6月17日	初夏のガーデニング	2
10	6月24日	ビデオ鑑賞「四月物語」	1
11	7月1日	昔ながらの涼菓を作ろう	7
12	7月8日	ジャガイモ掘り	1
13	7月15日	ティーアワー	0
14	9月30日	ティーアワー	0
15	10月7日	秋のガーデニング	1
16	10月14日	アイロンビーズ	1
17	10月21日	陶芸体験Ⅰ	1
18	10月28日	抹茶アワー	2
19	11月04日	陶芸体験Ⅱ	2
20	11月11日	陶芸体験Ⅲ	2
21	11月18日	おもちパーティ	4
22	12月2日	ケーキのトッピングを楽しもう	9
23	12月9日	フラワーアレンジメント	1
24	12月16日	ビデオ鑑賞 "Nightmare before Christmas"	0
25	1月6日	心理テストで自己分析	0
26	1月13日	ティーアワー	0
		合 計	56

表8 2006年度 各回のプログラムと参加人数

回数	実施日	プログラム	参加人数
1	4月7日	ティーアワー	17
2	4月14日	心理テストで自己分析しよう	5
3	4月21日	春のガーデニング体験Ⅰ	3
4	4月28日	春のガーデニング体験Ⅱ	0
5	5月12日	コラージュを作ろう	1
6	5月19日	抹茶アワー	2
7	5月26日	七輪陶芸①	1
8	6月2日	初夏のガーデニング	0
9	6月9日	七輪陶芸②	1
10	6月16日	七輪陶芸③	2
11	6月23日	昔ながらの涼菓を作ろう	9
12	6月30日	七夕 笹飾り	0
13	7月7日	夏のガーデニング体験	2
14	7月14日	ティーアワー	4
15	9月22日	ティーアワー	1
16	9月29日	レゴ大会	6
17	10月06日	クッキーを焼こう	1
18	10月13日	心理テストで自己分析しよう	3
19	10月20日	七輪陶芸①	6
20	10月27日	さつまいも掘り	3
21	11月10日	七輪陶芸②	6
22	11月17日	七輪陶芸③	6
23	12月01日	おもちパーティ	3
24	12月15日	クリスマスリースをつくろう	4
25	12月22日	ケーキのトッピングを楽しもう	5
26	1月12日	ティーアワー	1
		合 計	92

表9 2007年度 各回のプログラムと参加人数

回数	実施日	プログラム	参加人数
1	4月6日	ティーアワー	5
2	4月13日	心理テストで自己分析してみよう	3
3	4月20日	春のガーデニング	1
4	4月27日	クッキーを焼こう	6
5	5月11日	コラージュを作ろう	4
6	5月18日	箱庭ってなに?	3
7	5月25日	七輪陶芸①	10
8	6月1日	初夏のガーデニング	3
9	6月8日	七輪陶芸②	10
10	6月15日	七輪陶芸③	8
11	6月22日	七夕の笹飾り	12
12	6月29日	夏のガーデニング体験	1
13	7月6日	涼菓をつくろう	8
14	7月13日	抹茶アワー	6
15	9月21日	ティーアワー	4
16	10月5日	エコクラフト	5
17	10月12日	マンダラ塗り絵	3
18	10月19日	レゴ大会	2
19	10月26日	抹茶アワー	4
20	11月2日	さつまいも掘り	4
21	11月09日	リラックス体操	3
22	11月16日	エコポ	4
23	12月7日	おもちパーティ	8
24	12月14日	クリスマスアレンジメント	3
25	12月21日	クリスマスケーキでパーティ	6
26	1月11日	ティーアワー	2
		合 計	128

表10 2008年度 各回のプログラムと参加人数

回数	実施日	プログラム	参加人数
1	4月11日	ティーアワー	12
2	4月18日	心理テストで自己分析してみよう	5
3	4月25日	クッキーを焼こう	6
4	5月2日	春のガーデニング体験	2
5	5月9日	切り絵でアート	2
6	5月16日	コラージュを作ろう	3
7	5月23日	大学の近くを散策しよう	3
8	5月30日	七輪陶芸①	1
9	6月6日	初夏のガーデニング	3
10	6月13日	七輪陶芸②	2
11	6月20日	七輪陶芸③	2
12	6月27日	昔ながらの涼菓を作ろう 七夕飾り	3
13	7月4日	～DVD『銀河鉄道の夜』を見ながら～	2
14	7月11日	抹茶アワー	4
15	9月19日	ティーアワー	2
16	9月26日	エコクラフト①	2
17	10月3日	エコクラフト②	2
18	10月10日	リラククス体操	2
19	10月17日	日本の文化に親しもう（川柳作り）	4
20	10月24日	マンダラ塗り絵	2
21	10月31日	エコポット	3
22	11月7日	さつまいも掘り	2
23	11月14日	書道体験	2
24	11月28日	紅葉狩り	2
25	12月05日	心理テストで自己分析をしてみよう	3
26	12月12日	クリスマスアレンジメント	1
27	12月19日	クリスマスケーキでパーティ	2
28	1月9日	抹茶アワー	2
		合計	81

表11 2009年度 各回のプログラムと参加人数

回数	実施日	プログラム	参加人数
1	4月10日	ティーアワー	4
2	4月17日	心理テストで自己分析してみよう	8
3	4月24日	クッキーを作ろう	4
4	5月1日	春のガーデニング	6
5	5月8日	コラージュを作ろう	7
6	5月15日	新緑の川沿い散策を楽しむ	11
7	5月29日	七輪陶芸①	4
8	6月5日	書道体験	11
9	6月12日	七輪陶芸②	4
10	6月19日	七輪陶芸③	4
11	6月26日	切り紙アート	12
12	7月3日	DVD『星座入門』鑑賞会 ～七夕飾りを作りながら～	8
13	7月10日	昔ながらの涼菓を作ろう	11
14	7月17日	抹茶アワー	18
15	9月18日	ティーアワー	1
16	9月25日	リラククス体操	4
17	10月2日	エコクラフト①	6
18	10月9日	エコクラフト②	6
19	10月16日	秋のガーデニング	7
20	10月23日	My落款を作ろう	6
21	10月30日	書道体験	6
22	11月6日	さつまいも掘り	7
23	11月13日	日本の文化に親しもう	6
24	11月27日	マンダラ塗り絵（おいもで調理）	6
25	12月4日	紅葉狩り	5
26	12月11日	クリスマスアレンジメント	5
27	12月18日	クリスマスケーキでパーティ	11
28	1月8日	抹茶アワー	4
		合計	192

た。それは、Reアワーに参加して、その体験をレポートに書いて提出すると付加点を与えるというもので、その結果、2009年度に192人、2010年度に151人と年間のべ参加人数が急増した。この2年間には、学生相談室のカウンセラーが担当する授業を履修している学生が自分の興味に合った企画に1回参加するというケースがしばしば見られた。しかし、その工夫をやめると再び参加者の減少傾向が明白になった。そこで、参加人数を増やすさらなる工夫の一環として、それまで希望者が来たい時に気軽に参加できるオープン形式をとっていたが、2012年度より月ごとにテーマを決め事前予約を受け付けるというルールを導入した。もっとも、当日参加も見学も可能にしているため、実質的にはオープン形式と変わりはない。

前期と後期を比較すると、2012年度を除いて後期は前期より、参加人数が減少する傾向にある。前期は友人作りや居場所作りなどのニーズにグ

ループ活動が合いやすく、後期はアルバイトや部活などを始め、学内に居場所も確保できたため、グループの必要性を感じなくなる例が多いという印象を持っている。

次にプログラムの内容（表2～15）を見ていくなかで、企画したものの参加人数が0人だったものを挙げる。2000年度から2013年度までの参加者0人の回の内容、「カルトってなに?」「ティーアワー」「癒しの音楽を聴こう」「ビデオ鑑賞」「春の草花にふれてみよう」「秋の草花を植えてみよう」「春のガーデニング」「さつまいも掘り」「遠足に行こう」「心理テストで自己分析をしてみよう!」「お好み焼きパーティー」「ハーブを使ったデザート作り」「コラージュをつくろう」「七夕の笹飾り」である。

「ティーアワー」は、学期の初回と最終回ごとに開催している。前期の初回には新入生が施設見学がてら誘い合って訪れるが、他の回は少なく、

表12 2010年度 各回のプログラムと参加人数

回数	実施日	プログラム	参加人数
1	4月09日	ティーアワー	7
2	4月16日	心理テストで自己分析してみよう	9
3	4月23日	ホットプレートで簡単お菓子作り	10
4	4月30日	春のガーデニング	4
5	5月7日	コラージュを作ろう	2
6	5月14日	新緑の川沿い散策を楽しむ	3
7	5月21日	書道体験	5
8	5月28日	七輪陶芸①	4
9	6月4日	初夏のガーデニング	4
10	6月11日	七輪陶芸②	4
11	6月18日	七輪陶芸③	7
12	6月25日	切り紙アート	6
13	7月2日	DVD「星座入門」鑑賞会 ～七夕飾りを作りながら～	2
14	7月9日	指で編むエコたわし	9
15	7月16日	抹茶アワー	7
16	9月24日	ティーアワー	4
17	10月1日	秋のガーデニング	3
18	10月8日	声を出してみよう	6
19	10月15日	リラクセス体操	5
20	10月22日	My 落款を作ろう	2
21	10月29日	さつまいも堀り	6
22	11月12日	絵手紙を描こう	2
23	11月26日	おいもで Cooking	6
24	11月13日	書道体験	6
25	11月27日	さつまいも堀り	6
26	12月03日	クリスマス・アレンジメント	6
27	12月17日	抹茶アワー	3
28	12月24日	クリスマスケーキでパーティ	4
29	1月7日	書き初めをしよう	4
30	1月14日	ろくろ体験	5
		合 計	151

参加人数0人の回が8回もあった。しかし、2002年度6月のサッカーの世界カップを見ながらのティーアワーには32人も参加し、大層盛り上がった。このことから、ただ話をする場を提供するより、何かに関心を持ってもらうことが必要と考え、2007年度より、年4回の「ティーアワー」の内2回を「抹茶アワー」に変更した。「抹茶アワー」は、初めのうちは単発で行っていたプログラムであったが、好評であったので、2007年度より定期的に実施している。

「ガーデニング」などの園芸プログラムは初期から参加人数が低迷している。生きた植物を扱い、季節のことも考慮するため、準備や世話などプログラム実施以外の時間もスタッフにかかる負担は大きいのだが、参加人数がなかなか増えない現状である。

「七輪陶芸」は七輪を窯として用いる陶芸で、

表13 2011年度 各回のプログラムと参加人数

回数	実施日	プログラム	参加人数
1	4月8日	ティーアワー	3
2	4月15日	心理テストで自己分析してみよう	2
3	4月22日	炊飯器で簡単お菓子作り	1
4	5月6日	春のガーデニング	0
5	5月13日	書道体験	3
6	5月20日	新緑の川沿い散策を楽しむ	4
7	5月27日	七輪陶芸①	4
8	6月3日	初夏のガーデニング	3
9	6月10日	七輪陶芸②	5
10	6月17日	七輪陶芸③	4
11	6月24日	切り紙アート	3
12	7月1日	マーブリング	4
13	7月8日	リラクセス体操	2
14	7月15日	抹茶アワー	4
15	9月23日	ティーアワー	1
16	9月30日	コラージュ	2
17	10月7日	書道体験	2
18	10月14日	リラクセス体操	1
19	10月21日	エコポを作ろう	2
20	10月28日	エコポに寄せ植えをしてみよう	3
21	11月4日	さつまいも堀り	0
22	11月11日	マンダラ塗り絵	2
23	11月18日	おいもで Cooking	3
24	12月2日	絵手紙を描こう	2
25	12月9日	クリスマス・アレンジメント	4
26	12月16日	クリスマスケーキでパーティ	2
27	1月6日	抹茶アワー	1
28	1月13日	書き初めをしよう	4
		合 計	71

成型・彩色・焼成という3段階の工程があるため、約1ヶ月3回のシリーズで行っている。授業などとの兼ね合いで時間が確保しづらいが、学生に人気で、2006年度まで前期も後期も開催していた。2007年度から、陶芸担当者が後期の金曜日に授業を担当することになり、時間的な無理が生じ、陶芸は前期のみの開催となった。シリーズであるため、1回目に参加した学生はほとんど継続して参加している。途中都合がつかず作業できなかった学生は、他の曜日や時間外に来て続きの作業を行っていた。

「クッキー」「涼菓」などの調理プログラムは、実施時期に応じて食を通じて季節を感じることができるような食材を選ぶようにしており、後期には、園芸プログラムで育てたさつまいもを使用している。2006年度頃までは「食べる」企画をすれば、参加人数が急増する傾向にあったが、2007年

表14 2012年度 各回のプログラムと参加人数

回数	実施日	テーマ	プログラム	参加人数
1	4月6日		ティーアワー	8
2	4月13日	自己分析	自分の特徴を知ろう①	3
3	4月20日	セミナー	自分の特徴を知ろう②	4
4	4月27日		新緑の川沿い散歩を楽しむ	0
5	5月11日	自然と	春のガーデニング	2
6	5月18日	ふれ合おう	ハーブを使ったデザート作り	0
7	5月25日		七輪陶芸①「成型」	6
8	6月1日	陶芸	火をおこしてみよう	5
9	6月8日	セミナー	七輪陶芸②「彩色」	4
10	6月15日		七輪陶芸③「焼成」	7
11	6月22日		書道体験	4
12	6月29日	アート	コラージュをつくろう	2
13	7月6日	セミナー	絵手紙を描こう	2
14	7月13日		抹茶アワー	4
15	9月21日		ティーアワー	4
16	9月28日	心と体	簡単ストレッチ	6
17	10月5日	セミナー	大人のラジオ体操	4
18	10月12日		性格テストを受けてみよう	6
19	10月19日	キャリア	職業興味テストを受けてみよう	4
20	10月26日	探求	コミュニケーションゲームをやってみよう	5
21	11月2日		マンダラ塗り絵	3
22	11月9日	実りの秋	さつまいも掘り	5
23	11月16日	の秋	おいもでCooking	5
24	11月30日		絵手紙を描こう	4
25	12月07日	クリスマス	クリスマス・アレンジメント	3
26	12月21日	★	クリスマスケーキでパーティ	7
27	1月11日	クリスマス	抹茶アワー	4
			合計	111

表15 2013年度 各回のプログラムと参加人数

回数	実施日	テーマ	プログラム	参加人数
1	4月5日		ティーアワー	5
2	4月12日	自己分析	心理テストで自分の特徴を知ろう①	2
3	4月19日	セミナー	心理テストで自分の特徴を知ろう②	2
4	4月26日		コラージュを作ろう	2
5	5月10日	自然と	新緑の川沿い散歩をカメラ持参で楽しむ→雨天のためビデオ鑑賞に変更	2
6	5月17日	ふれ合おう	フォト俳句をやってみよう	3
7	5月24日		春のガーデニング	2
8	5月31日		七輪陶芸①「成型」	6
9	6月7日	陶芸	火をおこしてみよう	3
10	6月14日	セミナー	七輪陶芸②「彩色」	6
11	6月21日		七輪陶芸③「焼成」	3
12	7月5日	アート	切り絵アート	4
13	7月12日	セミナー	書道体験	2
14	7月19日		抹茶アワー	4
15	9月27日		ティーアワー	0
16	10月4日		簡単ストレッチ	3
17	10月11日	心と体	大人のラジオ体操	3
18	10月18日	セミナー	声に出してみよう	4
19	10月25日		コミュニケーションゲームをやってみよう	4
20	11月1日	実りの秋	さつまいも掘り	4
21	11月8日	の秋	マンダラ塗り絵	6
22	11月15日		お芋でクッキング	7
23	12月6日		絵手紙を描こう	4
24	12月13日	クリスマス	クリスマス・アレンジメント	6
25	12月20日	★	クリスマスケーキでパーティ	4
26	1月10日	クリスマス	書き初めをしよう	2
27	1月17日		抹茶アワー	5
			合計	98

度以降それほど顕著ではなくなってきた。

2011年度の後期から金曜日勤務のカウンセラーが全員午後に授業を持つことになったため、後期のReアワーに関してグループ専門担当以外のカウンセラーの協力がそれまで通り望めなくなった。そのため、2011年度から後期のプログラムの内容は、あまり準備のいらぬもの、野外に出ないものを中心に組むことになった。「マンダラ塗り絵」「絵手紙を描こう」などの絵画工芸プログラム、「コミュニケーションゲームをやってみよう」「声に出してみよう」などの言語を媒体とするプログラム、「性格テスト」「職業興味テスト」など心理検査を用いたプログラムである。

(2) 単発型グループ活動「グループワーク」

単発型グループワークのテーマと各回の参加人

数、実施場所を表16に、参加人数の推移を図2に示す。

表16と図2の「その他」とは教職員、学生相談室スタッフ、学外参加者の数を合計した値である。時期や曜日は、金曜日限定のReアワーと違い、講師の都合と大学のカリキュラムにより、その都度設定している。

まず、参加人数の推移を見ると、2005年度までは学生の参加人数は多い。特に2004年度の「茶の湯体験をしよう」の回では24人と最も高い数値となっている。この時は、文学部の教員がゼミで告知し学生たちに参加するよう呼びかけ、自身も参加してくれたことに因る。「スポーツチャンバラをやってみませんか」の参加人数を見ると、2002年度は13人、2004年度は18人と多いが、2008年度には3人に減っている。この頃には、本校舎から

表16 単発型グループ活動の各回のテーマと参加人数

年度	日付	テーマ	実施場所	学 生 (人)	その他 (人)	合 計 (人)
2000年	①6/6 (火)	茶の湯を体験しよう	18号館	18	5	23
	②12/19 (火)	心とからだの健康を学ぶ ——気功太極拳の体験を通して——	18号館	7	6	13
2001年	③6/6 (水)	茶の湯を体験しよう——第2章 茶は万病の妙薬なり——	18号館	12	5	17
	④11/21 (水)	太鼓をつくって自分の音を響かせよう (第1回目 太鼓をつくる)	18号館	7	4	11
	⑤11/28 (水)	太鼓をつくって自分の音を響かせよう (第2回目 音を響かせる)	18号館	12	4	16
2002年	⑥7/3 (水)	茶の湯を体験しよう ——第3章 茶カブキをして古人の遊びのひとつときを——	18号館	7	5	12
	⑦10/2 (水)	陶芸で照明器具づくり 第1回	18号館	5	1	6
	⑧10/9 (水)	陶芸で照明器具づくり 第2回	18号館	5	1	6
	⑨10/30 (水)	陶芸で照明器具づくり 第3回	18号館	5	1	6
	⑩12/19 (木)	スポーツチャンバラをやってみませんか	18号館	13	4	17
2003年	⑪6/25 (水)	茶の湯を体験しよう ——第4章 茶の湯とはただ湯をわかし 茶を点てて飲むばかりなる事と知るべし——	18号館	12	3	15
	⑫12/11 (木)	伝統文化 狂言を体験しよう	18号館	13	4	17
2004年	⑬6/28 (月)	茶の湯を体験しよう ——第5章 茶カブキをして五感をきたえる——	18号館	24	5	29
	⑭11/19 (金)	スポーツチャンバラをやってみませんか	18号館	18	5	23
2005年	⑮6/10 (金)	茶の湯体験——「一服のお茶を点ててみよう」——	18号館	8	5	13
	⑯11/16 (水)	香道体験——「香を通した自己理解」——	18号館	11	4	15
2006年	⑰10/19 (木)	茶の湯体験——「秋を感じてみよう」——	18号館	4	6	10
	⑱12/8 (金)	カプラをしよう	18号館	4	6	10
2007年	⑲6/21 (木)	茶の湯体験しよう ——茶カブキをして古人の遊びのひとつときを——	18号館	14	5	19
	⑳12/6 (木)	カプラをしよう	18号館	5	6	11
2008年	㉑6/10 (火)	茶の湯体験——一服のお茶を点ててみよう——	18号館	3	6	9
	㉒11/26 (水)	スポーツチャンバラをやってみませんか	18号館	3	5	8
2009年	㉓6/23 (火)	茶の湯を味わう——茶カブキ体験——	18号館	10	5	15
	㉔11/20 (金)	学祭特別企画 ①手作りプラネタリウム鑑賞体験 ——不思議な小宇宙を味わおう——	本校舎 教室	14	12	26
	㉕11/20 (金)	学祭特別企画 ②箱庭体験	18号館	3	1	4
	㉖11/20 (金)	学祭特別企画 ③茶の湯体験	18号館	2	1	3
2010年	㉗6/2 (水)	カプラをしよう	本校舎 小体育館	15	7	22
	㉘12/10 (金)	カーリング・ユニカールをしよう	本校舎 小体育館	16	7	23
2011年	㉙6/22 (水)	室内ローンボールドをしよう	本校舎 小体育館	8	5	13
	㊱11/25 (金)	カード遊びでコミュニケーション力をつける！	18号館	10	4	14
2012年	㊲6/27 (水)	カプラをしよう	18号館	4	6	10
	㊳11/21 (水)	学祭特別企画 たこ焼きパーティー	18号館	9	7	16
2013年	㊴6/28 (金)	ユニカールをしよう	本校舎 小体育館	8	13	21
	㊵11/22 (金)	学祭特別企画 たこ焼きパーティー	18号館	11	10	21
		合 計		320	174	494

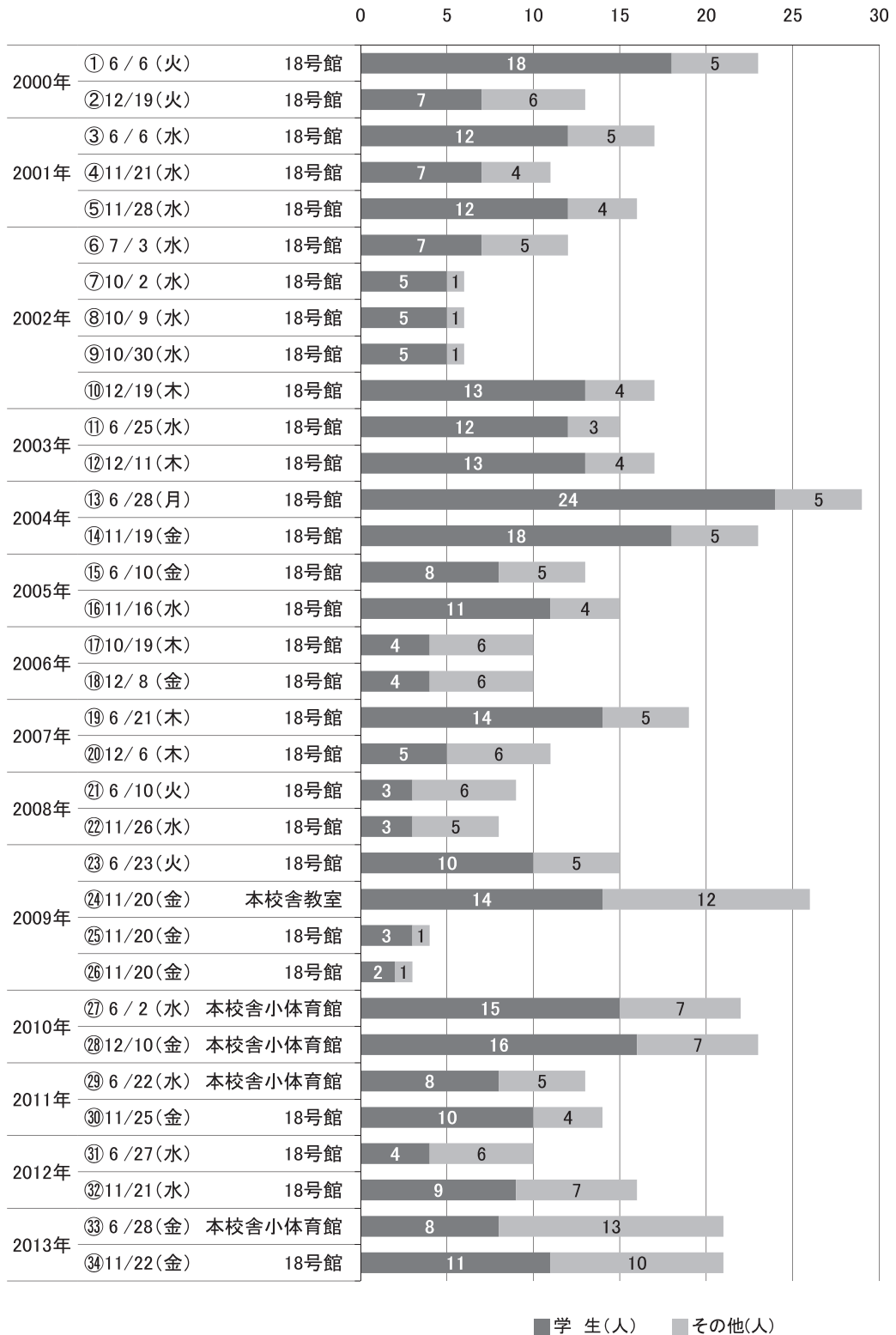


図2 単発型グループ活動の参加人数の推移

離れた18号館でグループワークを開催しても学生は集まりにくいと考え、2009年度からは、なるべく本校舎での開催や授業のない大学祭期間中の開催を計画した。

2009年度後期のグループワークでは、大学祭の期間を利用し、本校舎内の教室を借りて「手作りプラネタリウム観賞体験」を開催し、14人の学生が参加した。うち天文同好会のメンバー5名が誘い合って参加している。

また「カプラをしよう」の回の参加人数を見ていくと、18号館で開催した2006年度は4人、2007年度は5人と少ないが、本校舎小体育館で開催した2010年度の回では15名と大幅に増えている。その後2012年度の回は予約人数が少なかつたため、18号館で開催すると参加人数は4人であった。小体育館で行えば、当日参加する学生がいたかもしれない。

体育の非常勤講師をゲストに迎え、小体育館で開催した2010年度の「カーリング・ユニカールをしよう」の参加人数は16人、2011年度の「室内ローンボールズをしよう」は8人、2013年度の「ユニカールをしよう」は8人と、本校舎にある小体育館で開催すると比較的参加人数は多くなっている。しかし、単発型グループ活動全体として参加人数を見ていくと、2000年度から2005年度までは、「陶芸で照明器具作り」シリーズを除き、少なくとも7人以上の参加があり、最高は24人であった。それに比べて2006年度以降は2人～4人しか参加人数のいない回が7回出現している。場所を本校舎に移したり、教職員の協力を仰ぐことで増えた回もあるが、参加人数は、全体的には減少傾向にある。2013年度は、学生相談室の利用者（個人面接、Reアワー・ランチアワーなど）が大半を占め、宣伝を見ただけで参加する人はほとんどいない。

次にテーマ別に見ていく。2000年度から2009年度まで前期は茶の湯で、後期のテーマはバラエティに富み、同じテーマで2年続けて催されるこ

とはなかった。また、内容によっては、1回で終わらず継続セッションを設けている。2001年度の「太鼓を作って自分の音を響かせよう」は2回、2002年度の「陶芸で照明器具作り」は連続3回実施された。この頃は学内他機関との共同研究プロジェクトによる十分な予算が確保されており、外部講師をサポートする学生相談室スタッフの協力体制が整っており、余裕を持って運営できていた様子がうかがえる。

「茶の湯を体験しよう」は2004年度までは特に安定して人気が高く、参加人数は毎回10人以上で、2004年度には24人と最高の参加人数となった。茶の産地を当てる2007年度の「茶カブキ」では参加学生は14人、その中には日本の伝統文化に触れたいと希望した留学生が教員の通訳に助けられながら参加しており、2009年度には10人参加している。

「スポーツチャンバラをやってみよう」は子どもの頃に親しんだチャンバラをスポーツとして行うもので、男子学生に人気があった。2002年度に13人（内、男子10人）、2004年度に18人（内、男子14人）参加したが、2008年度は3人（内、男子3人）と減少している。

学祭特別企画として2009年度に本校舎の教室で開催した「手作りプラネタリウム観賞体験」は、大学祭の出し物の一つとして、学生だけではなく一般来客にも体験してもらうことができた。また、天文同好会の学生たちが関心を持って、後輩も呼んで参加していた。その年の学祭企画としては、同時に18号館において「箱庭体験」「茶の湯体験」を実施した。参加人数は「手作りプラネタリウム観賞体験」が14人に対し、「箱庭体験」が3人、「茶の湯体験」が2人である。

「カプラをしよう」はフランス製の松の木を使った本格的な積み木遊びで、大人も子どもも楽しめるものであるが、大学生にはあまり知られておらず、2007年度に5人、2012年度に4人と参加人数は伸びなかった。だが、本校舎の小体育館で

行った2010年度は、15名に増加した。

2010年度と2013年度の「ユニカールをしよう」と2011年度の「室内ローンボールズをしよう」は、生涯スポーツの一種で、老若男女問わず楽しめるスポーツであるが、2010年度16人、2011年度8人、2013年度4人と徐々に参加人数が減少している。

2011年度の「カード遊びでコミュニケーション力をつける!」は、学生相談室のスタッフが初めて企画・運営した外部講師を呼ばない単発型グループワークで、10人参加した。就職活動に向けて自身のコミュニケーション能力に自信が持てない学生が多かった。

2012年度・2013年度の学祭特別企画として開催した「たこ焼きパーティーをしよう」も、学生相談室スタッフの企画・運営である。学祭には行ってみたいが一人で行く勇気がない、学祭中、本校舎に居場所がないという学生のために企画した。地方から進学した学生が初めてたこ焼き作りを挑戦する、たこ焼き屋でアルバイト経験のある学生が皆にコツを伝授する、などの姿が見られ、和気あいあいとした雰囲気で行われた。

(3) 「ランチャワー」

ランチャワーの2011年度から2013年度までの年間のべ参加人数を表17に示す。ランチャワー

は2013年11月から西宮キャンパス（マネジメント創造学部）でも実施しているが、期間が短いため参加人数には含めていない。

年間のべ参加人数は、2011年度は81人、2012年度は170人、2013年度は310人と全体的に増加傾向にある。立ち上げから丸3年が立ち、ランチアワーの存在と週2回の実施ペースが、学生たちの間に定着してきたと思われる。3年を通して、試験期間中である7月と1月に参加人数が少ない。また、2011年度と2013年度では、前期と比べて後期に参加人数が多く、特に2013年度の月曜日においては、前期のべ参加人数36人、後期のべ参加人数113人で、3倍以上に増えており、その傾向が顕著に見られる。スタッフの勤務日の都合により2013年後期には同一のスタッフが月曜・水曜共に担当した。一時的ではあるが、スタッフ一名が両方の曜日を担当したことで、二つのグループ間の風通しがよくなり、スタッフ同士の情報共有が密にできグループが安定したこと、顔見知りのカウンセラーがいることで安心して両方の曜日に参加した学生が数人いたことが参加人数の増加につながったと考えられる。学生の参加形態はさまざまで、曜日を選んで参加する学生もいれば、開催曜日が増えたことで、月・水曜日両方に参加する学生もいた。友人と連れ立って参加する学生よりも、一人で参加し始めた学生が、その後継続して参加

表17 2011～2013年度 ランチャワーのべ参加人数と平均参加人数

年 度	開催曜日	前 期		後 期		年 間		
		実施回数	参加人数	実施回数	参加人数	実施回数	参加人数	平均参加人数
2011	月					29	81	2.8
	水	15	35	14	46			
2012	月			17	36	50	170	3.4
	水	16	75	17	59			
2013	月	16	36	17	113	67	310	4.6
	水	16	73	18	88			

するケースが多いようだ。

また、月曜と水曜のグループの雰囲気には相違があった。月曜日のメンバーには4回生が多く、コミュニケーション能力にたけたメンバーが話題をリードしており、その場で出た話題をグループ全体で共有できていた。それはファシリテーター同士が近くに座っていたことで、ひとつの話題に集中しやすい流れを作りやすかったのかもしれない。水曜日の方は、ファシリテーターは、なるべく全体に配慮できるように離れて座っていたことが影響してか、ファシリテーターや隣の人とのみ話すメンバーが多く、話題が分散し、その場にくつもの小グループが形成されていた。その分、授業や成績、体調など個人的な事情や、鉄道など個別の趣味を話題にすることが多く、自己開示がしやすかったと思われる。

V. 考 察

前節では本学で行っている3つのグループ活動について、参加者の動向を示した。その結果からここでは、(1) 学内連携について、(2) 学生気質の変化、(3) ランチアワーの活用という3点から考察していきたい。

(1) 学内連携について

単発型グループ活動「グループワーク」における参加学生の推移を見ると(表16、図2)、一番参加者数が多かったのは2004年度の6月に行った「茶の湯を体験しよう」である。この時、参加者数が増加したのは、文学部の教員がこちらのグループワークのねらいである五感を通じた体験することに賛同を示し、ゼミの学生に参加を促し、教員も率先して参加した経緯があるからである。また、2007年度の6月に行った「茶の湯を体験しよう——茶カブキ」の際は、留学生の参加があったことが参加者を増加させる要因になっている。この年、留学生が集まっている大学内の「あじさいルーム」にも学生相談室のスタッフが訪

ね、チラシを説明して配ったという経緯もある。それによって国際交流センターの教員が、日本文化を体験することに賛同し、留学生に呼びかけてくれた。このように、教職員が興味を示し、体験することの大切さを学生に働きかけてくれたことは非常に意味がある。もちろん、そういった流れが起こるためには、ふだんから学生相談室のスタッフと教職員の間に関係があることが大事になろう。

また、近年の企画で言うと、2009年度の11月に行った「手作りプラネタリウム鑑賞体験」は、大学祭中に行ったもので、本校舎の教室を借りての実施であった。この時は元々学生相談室を利用している学生に加えて、大学祭で展示をしていた天文同好会の学生が興味を示して来観し、天文同好会の他のメンバーにも声をかけてくれ、盛況となった。2010年度12月に小体育館で行った「カーリング・ユニカールをしよう」で参加者が多かったのは、講師が本学非常勤講師であったことで、基礎体育学演習に参加している学生にも声をかけてくれたことが要因と考えられる。2012年度の11月に行った「学祭企画たこ焼きパーティー」では、岡本キャンパスの学生だけでなく、西宮キャンパスの学生やポートアイランドキャンパスの学生も顔を出してくれた。これは、学生相談室のスタッフが、ポートアイランドキャンパスや西宮キャンパスの学生相談室にも勤務していることから、直接学生に呼びかけたことが功を奏したものである。また、この時は学生部の職員も顔を出してくれ、学生と一緒にたこ焼きを食べながら談笑することもあった。このように、さまざまな「体験」を持つことが重要だという認識を、教職員が共有し、学生たちの背中を押すことによって、彼らが豊かな体験の機会を持つことができると言える。ネット上での広報も今後重要な手段となっていくであろうが、教職員を通しての勧めというアナログな宣伝も軽視できないと言える。

(2) 学生気質の変化

2007年度の継続型グループ活動「金曜 Re アワー」は平均参加人数が4.9人とそれまでの参加人数の中で一番高い数値になっている。その理由は同年にグループ担当のスタッフが入ったことからと言えよう。ところが、翌2008年度の平均参加人数は3.1人と低い値になっている。その要因について考えてみると、2008年度から本学で全学生に GPA (Grade Point Average) 制度が導入された時期と一致し、文部科学省の方針により大学教育のあり方が変化したことと関連していることが考えられる。その発端は、大学審議会答申「21世紀の大学像と今後の改革方針について」(1998)の中で、厳格な成績評価の例として GPA が挙げられたことに遡ると考えられる。本学では、2007年度から GPA を取り入れており、2007年度にはその年の入学生にのみ導入し、翌2008年度から全学生に対象を広げている。全学生に GPA が適用されるようになった2008年度に参加者が減少したとすると、GPA の影響を受けて、学生が授業に出席することを最優先するようになったと推測できる。そこで、2009年度・2010年度は、授業を担当するスタッフが、履修している学生に対し、Re アワーに参加し、その体験をレポートに書くことと付加点を与えるという方法を取ると、Re アワーの参加人数が大幅に伸び、各年度の平均人数で見て、一位、二位を占めている。このように、授業への出席を重要視するように学生の気質が変化しており、その影響がグループワークの参加者数の減少に顕著に表れていると考えられる。

また、単発型グループ活動「グループワーク」においても、授業出席優先の傾向が数字に表れている。このグループワークは基本的には前後期、各1回ずつ実施されている。2001年度、2002年度の後期はシリーズで行っており、この頃は、本学におけるグループ活動のねらいである体験を育むことや、体験を通して自己理解を深めることが、

学生に自然に受け入れられていた時代と言えよう。その後、教員の勧めでゼミ生が参加した2004年度の茶の湯体験や、2007年度の茶カブキでの留学生の参加といったように、学内連携の効果が見られて盛況の年もある。2009年度後期の「特別企画①手作りプラネタリウム鑑賞体験」、2011年度後期の「カード遊びでコミュニケーション力をつける!」、2012年度・2013年度後期の「学祭企画たこ焼きパーティー」は、いずれも大学祭の時期に行われたものであり、参加人数は一定して多い。大学祭の期間中は授業が休講となるため、学生にとって参加しやすかったと考えられる。

このように、学生は授業への出席を重視するようになってから、グループの活動の時間が授業と重なると、グループの参加者が減り、授業がなければ、グループの内容に興味があると参加する学生もいる。特に、教職員などに背中を押されると参加する学生は増え、どこかに参加したい気持ちを持っていることがうかがえる。

また、本学学生相談室は、現在18号館という外来者向けのカウンセリングルームや、本学人間科学科の心理系教員の研究室や、心理系院生の研究室がある建物の中にあり、本校舎とは道を隔てた独立した校舎の立地となっている。これは、多くの学生の目に触れることなく、学生相談室を利用しやすいメリットがある。その一方で、本校舎と若干距離がある分、わざわざ出向くというデメリットもあると言えよう。

単発型グループ活動「グループワーク」でも、その辺りの関連は見られ、本校舎で行った企画は参加人数は安定して多い。学生へのサービスとして、学生相談室内での開催にこだわらず、むしろアウトリーチ活動として、本校舎での開催を増やしていくことは、今後の工夫の一つと言えよう。

継続型グループ活動の園芸プログラムは参加者が0人の時も多く、参加者がいても少数でなかなか参加人数に伸びが見られない。このことも最近の若者気質と関連している。つまり幼少期からの

居住環境としてマンション育ちの学生が増え、土に触れる体験をすることが少ないまま大学生になっているのではないだろうか。中央教育審議会報告「少子化と教育について」(2000)の中でも、「最近の子どもたちは、ゲームやテレビ等の普及により、どろんこ遊びや自然の中で駆け回ることなど年齢に応じた遊びを十分に経験しておらず、このことが子どもの想像力の不足や情緒の欠落につながっている」という指摘があることを述べ、こうした状況に対応するためには「親はできるだけ子どもを自然の中に連れ出して伸び伸びと遊ばせ自然との触れ合いを促す必要」や「子どもが自然と触れ合う機会を増やしていく」必要性があると述べられている。ここでは親が与える教育という意味合いであるが、それが十分になされていない現状がある。教育学者である金子(2007)は「従来は家庭におかれていた教育の機能を学校がしだいに全面的に引き受けさせられる」と述べており、家庭での教育力の低下と共に、学校がその機能を担っている状況を説明している。これらのことは筆者らの思いと通じるものであり、学生が社会に出る前にそういった体験不足を補うものとして、グループワークの一環としてプログラムを組んでいる。だからこそ、園芸プログラムに参加して土に触れる体験をする機会を設けたいと思うが、学生にとってはあまりにも生々しい体験であるため、参加がためらわれるのだと思われる。ランチアワーで、園芸プログラムで育てた野菜を使ってサラダとして出すと非常に好評であった。とはいえ、植物を育てて、それを収穫し、自ら口にするという一連の体験を学生たちにしてもらうのはなかなか難しいことと言える。

継続型グループ活動「Re アワー」でも調理プログラムを毎年実施している。以前は食べ物の企画をすると、参加者は増加する傾向が見られたが、近年は必ずしもそうとも言えなくなっている。これは、学生が自ら調理をし、そのプロセスを楽しむことに慣れていないことが要因となって

いると言えるだろう。また、飽食の時代の影響で、食べたいものは買って食べればいいという考えも強くなっているのだろうか。

このように、園芸プログラムや調理プログラムは、どちらも新たな参加学生を獲得するきっかけにはなっていない。今まで体験したことがないプログラムには参加しないという選択をしがちだと考えられる。これは自分にとってよく分からないものや、上手くできないかもしれない、つまり失敗するかもしれないと思うことは避けていくという最近の学生気質と繋がっているように感じられる。

2011年度後期に行った単発型グループ活動の1つ「カード遊びでコミュニケーション力をつける!」には10人の参加者がいた。その中で初参加の2名は、3回生で就職活動に不安を感じており、それに失敗しないための練習として参加したようであった。彼らはキャリアセンターでのグループディスカッションに参加した際、できないことへの指摘をされ、失敗感を抱えており、学生相談室の企画は楽しめたという感触を得たようだった。就職活動の不安は多くの学生が感じており、そのスキルを学ぶことも重要ではあるが、それ以前に、就職活動に直接つながりはしないが、遊び感覚でリラックスしながら自信をつけていく体験がもっと必要なのではないだろうか。

(3) ランチアワーの活用

授業に出席することを最優先する学生が増え、大学で長い時間を過ごすことから昼食をどうやってとるかという問題が切実になり、ランチアワーの参加者数は増加している。また、ランチアワーを実施していない曜日にもサロン室で食事をとっている学生の姿を見ることもあり、ここだと落ち着いて食事をとれる場所という認識が高まっているようにも感じられる。また、ランチアワーを実施している両日に参加する、あるいは年間を通して参加するケースが多い。

参加学生の傾向で言うと、対人関係が苦手であるとか、発達障害傾向の学生が個人で参加する機会が多く、何回も参加するうちに顔見知りになったり、少しずつ学内に知り合いが増えてくるといった面も出てきており、今後のグループ活動の活路になっていくと思われる。

実施しているスタッフの面から言うと、お昼の休憩時間も休憩にならないという側面もあるが、学生のニーズを感じたり、参加学生が途絶えないという手応えは非常にやりがいを感じるものもなっている。

さらに、継続型グループワーク「金曜 Re アワー」のように事前に準備や企画を立てるといった必要がなく実施出来る利点は大きい。また、継続して参加する学生が多いので、広報の努力も少なくて済む。大学の中でも近年は、費用対効果という見方が重視されるようになってきているが、まさにランチアワーの費用対効果は非常に大きいと言えるだろう。

また、ランチアワーは、対話が苦手な学生に対してもスタッフが少しずつ会話のきっかけを作ったりすることで、学生が話す練習の場にもなっている。オープンな参加形態ではあるが、同じメンバーが多いため半ば固定メンバーになっており、緊張を軽減した中で会話することも出来ている。ランチアワーは45分程の短時間であり、90分という長い時間を他の学生と過ごし、何らかの作業をするグループワークの参加は躊躇してしまう学生のニーズにも合っているのかもしれない。授業を休む必要がなく、しかも昼食の場を提供され、時間が短いことから他の学生とはほどほどの関わりで済むといった要因も、参加者が集まる一つの要因なのかもしれない。

そのように考えると残念な思いにもなるが、グループ活動について学生のニーズから考えてみると、ランチアワーの曜日を増やして拡充させていくことも一つの方向性と言える。

VI. おわりに

甲南大学は、1995年1月17日の阪神淡路大震災によって校舎の6割が全壊した。しかし、本校舎から離れた小さな日本家屋であった学生相談室は奇跡的に全壊を免れ、修理を施して震災後すぐに細々と活動していた。当初は震災による心の傷を癒せるのであればと、地域の方々にも開放し、話を聴く機会があった。その中で、古い下宿が全壊し火災が発生したため、友人が目の前にいるとわかっていながら、助けられなかったことを、ぼつりぼつりと語ってくれた近隣大学の学生との出会いは忘れられない。あれから20年、学内には便利で美しくなった校舎が立ち並び、学生相談室も1999年に新しい建物に移設され、学内の景色は一変した。「絆」ということがしばしば語られ、人々の心も古傷から立ち直り、明るくなったのかもしれない。しかし、学内に漂う空気は、何かとても重要なことが根こそぎ掘り取られていくような不安を掻き立て、若者たちの心底に育まれてほしいと感じることが、スリと抜け落ちていくような、不穏さを漂わせている。

そんな思いを払拭すべくグループ活動を始めて14年、担当者としては、「体験そのもの」を重視したグループ活動に、それなりの手ごたえは常にかけていたのだが、それをどう言語化し、今後の発展に繋げていくことができるかといえば、それは極めて困難なことであった。今回は何とかそこを乗り越えたいと、当初は全国の学生相談室紀要を紐解き、グループ活動に関する論文を検索してみた。しかし、グループ活動については「報告」として、担当者の主観的な手ごたえを記載している大学がほとんどで、論文としては、「個人面接だけではなく、グループを併用することに意味があった」という論調が記載されており、グループ活動の意味のみを検証した論文は皆無に近かった。そこで、まず本学の14年間のグループ活動についての軌跡を検証してみたのだが、残念ながら、グループ活動自体にどのような意味があり、

今後どのような活動を展開していくことが必要かといったことは明確にはできなかつた。しかし、IT化など生活形態の変化と共に学生の気質が変化し、今日の学生たちは、大学のシステムに適応することには熱心に取り組むはするが、自らの興味や関心に自主的に取り組み、青年期の課題である自我同一性の確立といった本質的な課題に取り組むことには消極的であること、その回復のためには、教職員との連携が重要であろうことは、明らかにできたのではないかと思う。ここで言う連携とは、コンサルテーションをすとか、相互に連絡を取り合うといったことではなく、学生相談室が主催するグループ活動のような「体験そのもの」が今の学生にとって重要であるという意識を、共有していたかどうかであった。

しかし、この考察を通して筆者らは、大学教育の根幹にかかわるとてもなく困難な大きな問題に向き合わされた気がする。つまり、本来、大学教育は高度な専門的知識やスキルを学ぶところと位置付けられるが、高度に機械化され、知識化されたがために、身体を通した感覚機能が鈍化し、そこから育まれるべき情緒的機能が磨かれなまま大学生活を送っている若者が相当数存在している。そして、そういった若者に対して、知識やスキル以前に、体験そのものを重視したグループ活動などの提供が必要であると発信していくことが、学生相談室にとって重要な役割であることが示唆されている。にもかかわらず筆者らが今回実施したように、活動内容と参加人数からだけではそれを検証し、グループ活動の意義を論じ、発信することは困難であった。

そこで、グループ活動の検証を行う上で、今後の課題として考えられるのは、一回一回のグループ活動における参加者の様子を、個人面接における記録と同様、グループを一つの事例として記録していくことがまず考えられるだろう。その記録に表れた学生たちの言動の変化を通して、グループ活動の効果がどこにあるのか、検証することが

できるのではないだろうか。グループ活動の場合、一般には「振り返り用紙」を学生に記入してもらい、それを分析することが行われることが多いが、学生相談室のグループ活動に参加する学生は、文章を書くことが苦手な場合が多く、振り返り用紙への記入を求めることは、参加者の減少を招くことになりかねない。あるいは抵抗なく記述しても、建前だけを記入する傾向が見られ、それほど記入された内容に読み取るべき意味があるとは考えられない。そのため難しいこととは思われるが、スタッフの関与しながらの観察と記録を、地道に続けていくことが必要と思われる。

また、グループ活動の方向性としては、筆者らが実施している「体験そのもの」を重視したグループ活動については、大学教育としてその必要性を教職員に理解してもらおう努力をすることが重要である。一方、近年の大学生の傾向やニーズから見ると、ランチアワーのように安心できる場で、短時間であるけれども繰り返し人と出会うという体験を積み重ねることで、その人なりの自信や、他者に対する信頼のようなものが生まれてくると考えられ、ランチアワーのようなグループ活動の拡大や継続が期待されていると言える。

最後に、長い年月、さまざまな形でグループ活動を支えて頂いた学生相談室スタッフの皆様には深く感謝します。特に、日々のグループ活動の準備だけでなく、この小論を書くにあたって、図や表の作成を全面的に引き受けてくださった、事務職員の里石さんには、本当にお世話になりました。この場を借りて厚くお礼申しあげます。

文 献

- 青柳寛之 2010 カウンセラーによる全学向け少人数体験型授業の試み——陶芸グループを中心とした概要の紹介と、受講者アンケートの分析——甲南大学学生相談室紀要第18号 18-28
- 青柳寛之・大谷祥子 2014 カウンセラーによる全学向け少人数体験型授業の試み（第2報）——グループ

- 体験コースを中心とした概要の紹介と受講者アンケートの分析——甲南大学学生相談室紀要第21号 15-27
- 大学審議会 1998 21世紀の大学像と今後の改革方策について——競争的環境の中で個性が輝く大学——(答申)
- 独立行政法人日本学生支援機構 2010 平成21年度(2009年度)大学、短期大学及び高等専門学校における障害のある学生の修学支援に関する実態調査結果報告書
- 独立行政法人日本学生支援機構 2014 平成25年度(2013年度)大学、短期大学及び高等専門学校における障害のある学生の修学支援に関する実態調査結果報告書
- 藤井茂樹 2011 我が国の大学における自閉症スペクトラム障害の学生相談の現状と課題 精神療法 Vol.37 No.2 金剛出版 201-207
- 早坂浩志 2010 学生に向けた活動2 ——授業以外の取り組み 学生相談ハンドブック 日本学生相談学会50周年記念誌編集委員会編 学苑社 185-201
- 池田 満 2012 学生相談活動におけるアカウントビリティ向上へむけて——プログラム評価の理論・モデルから——慶應義塾大学学生相談室紀要第42号 13-22
- 片山綾乃 2013 対人関係困難学生へのグループワーク併用の有効性についての検討 学生相談研究34 156-166
- 金子元久 2007 大学の教育力——何を教え、学ぶかちくま新書
- 菊池悌一郎 2013 学生相談におけるグループワークの実施形態についての検討 学生相談研究34 36-48
- 的場みぎわ 2011 人間関係を育む場としての継続的なグループワークの有効性——個別面接とグループワークを併用した事例から—— 学生相談研究31 207-217
- 日本学生相談学会50周年記念誌編集委員会編 2010 学生相談ハンドブック 学苑社
- 布柴達男・吉武清實 2011 教員による予防的學生支援の試み——理系大学院新入生初期適応のための交流ワークショップとその実施効果評価—— 学生相談研究32 131-143
- 高橋国法・石本豪・新野由里子 2012 個人面接とグループを活用した自閉症スペクトラム障害学生の支援——「二次障害(心的外傷)を想定した関与—— 学生相談研究33 127-138
- 友久茂子 2009 学生相談室における学生支援に関する一考察——グループ活動参加者の参加状況を通して—— 甲南大学学生相談室紀要第17号 28-38
- 中央教育審議会 2000 少子化と教育について(報告)

ABSTRACT

A Study on the Effects of the Group Experience at the Student Counseling Room

TOMOHISA Shigeko; WATARI Chika; MATSUMOTO Tomoko
Konan University

This paper reviewed the process of these group activities at Konan University Student Counseling Room from 2000 to 2013 and discussed the effects of these group experience on students.

We first examined the contents and number of participants of each group. Secondly, we compared the types of participation and examined its effects on the students.

At our counseling room, three types of groups and group activities has been offered to students; 1. the “periodic typed group” (so-called *Re-hour*), 2. “single session typed group” (*Group work*) (both started from 2000), 3. “lunch time session” (*Lunch-hour*) (started from 2011). “*Re-hour*” has been held every week for 90 minutes and “*Group work*” twice a year only. Both group activities aim at promoting the use of five senses of the participants. “*Lunch-hour*” has been held at lunch time twice a week so that the students can have lunch together with counselors and other students.

Our study revealed that the number of the participants of “*Re-hour*” and “*Group work*” decreased gradually, but the number of “*Lunch-hour*” increased. It was difficult to conclude the meaning and effects of the group activities in general.

Many students tend to acquire credits than gathering real experience and this might be one of the reasons why “*Lunch-hour*” group which is held between the classes is more frequently visited than other groups.

However, it became evident that the number of the participants joining the “*Re-hour*” and “*Group-work*” increased when the teaching staffs appreciate the meaning of group activity and encourage students to join the groups. Thus, deepening mutual understanding of the teaching staffs and counselors on campus, and enhancing the understanding and support of group experience are required.

Key Words : group experience, mutual understanding, student counseling
